

物としての建物、物としてのQ体

森一郎

いささか詩文風、いや呪文みたいに、こう語ることから始めましょう——「空からやってくる風雨をしのぐ、人間ならではの住まい、それが建物だ。地にどっしりと揺るぎなく建つ、人間ならではの住まい、それが建物だ。人間のみならず、生身の人間以上の存在がそこに住まうもの、それが建物だ」——この三つの文を、以下敷衍してみたいと思います。

「建物」とは何か、を問うために、それが「物」だということから考えてみましょう。

では、「物」とは何か。この問いを表立って問うたハイデガーによれば、「物」とは、この世界をともに形づくる様々な要素を集約し、その全体を凝縮して表わすもの、一言で言えば、世界を宿らせるものです。その場合の「世界」とは、天空、大地、神的な者たち、死すべき者たち、の四者——古代風に言えば「四大元素」——からなる、存在者全体のことを言います。ハイデガーの「物」論では、水やワインを入れる容器である「瓶^{かめ}」という身近な道具に即して、それこそ即物的に、「物」のあり方が論じられます。

天空から降り注ぐ雨露を、大地が受け入れて泉となり、清らかな水がそこに湧き出ずる。また、天空の太陽と大地の養分が結びついて、ぶどうが育ち、芳醇なワインがそこに出来上がる。それらは、人々の喉を潤し、また神前に捧げられる。天空と大地の恵みが、飲み物となって、神々や人間に贈られる。そのように贈り、贈られることの全体が、飲み物を注ぎ入れては注ぎ出すための瓶という「物」の存在のうちに、集約的に表わされている。つまり、物は世界を宿らせるのだと、そうハイデガーは考えるのです。

では、「建物」という物は、どのような仕方で天・地・神・人を宿らせるのか。

ハイデガーの建築論「建てる、住む、考える」の中に出てくる物の例は、「橋」です。川に架かった橋は、兩岸を結びつけて川のほとりの岸辺の風景としての大地を現われさせ、どんな天候でも川の流れに立ち続けるという仕方で天空に向けられている。橋は、川で隔てられた人々の往来を可能にし、聖人像が造りつけられて感謝と崇敬の的となる。そのように、物としての橋にも、大地と天空、神的な者たちと死すべき者たち、の四者からなる世界の全体が、籠められているというのです。

人の住む家屋を、最初のうちは例に挙げずに、橋という非住宅建築から説き起こして話を広げていくところが、ハイデガー建築論のミソなのですが（最後のほうでシュヴァルトの農家の屋敷の例が出てきます）、その大略は、冒頭に掲げた三文で表わせると言えます。しかしここは、東京女子大学旧体育館——Q体と略——をあえて例にとって考えることにします。Q体はいかなる意味で物であり、どのように世界を宿らせていたのか。

Q体には大きな窓があり、光がたっぷり射し込むので、照明なしでも明るい室内でした。風通しも良く、（新体育棟のように電気を大量に浪費する）空調設備はなくとも、夏に暑くて使えないということはありませんでした。春には南側に植えられた老桜が見事に咲き、

とくに二階のベランダからの眺めは絶景でした。ベランダに備えつけられた大きな花鉢に花を活ければ、その飾りだけで華やいだ景色でした。雨が降っても、(風雨どころかカラスが襲ってくる空オープンスペースき地と違って)瓦屋根をもつ近代建築の中に入れば安心です。館内のどの部屋にも立派な暖炉があり、火を入れて囲めば、団欒を愉しむことができます。全天候型のエコハウスは、そのすみずみに天空を宿らせていたと言ってよいでしょう。

Q体は堅固な造りで、築八五年経ってもビクともしませんでした。建造中に関東大震災があり、震災の翌年竣工ですから、耐震建築の鏡みたいな頑丈さを備えていました。しかも、(六階建ての新研究棟のようにでしゃばったり他を威圧したりすることなく)軒を低く抑えるべく地面を掘って低い床にし、腰や膝に優しい天然木を敷きつめていました。フロアで球技やダンスや武道にはげむ学生は、跳び跳ねては重力に逆らい、自由に舞ったり踊ったりしました。起伏に富んだ室内運動場は、演劇や演奏にピッタリの音響空間でした。建物が丸ごと、大地に立つこと、地上に生きることを、表現していました。

Q体は一九二四(大正一三)年に建てられた、大学創立期の校舎です。新渡戸、安井、ライシャワーといった創設の父ちちはは母が、女子高等教育の理念を語り合い、その気高き精神をレーモンドに伝えました。キャンパス全体計画を任せられ、意気を感じた若き建築家は、学園の中心に「体育館兼社交館」を位置づけ、学生が心身ともに健やかな女性として教養を磨く修練の場としました。その不朽のスピリットは、そこで学ぶ歴代の学生たちに受け継がれてきました。大学の原初と伝統、神話と伝説が、奥ゆかしき学び舎の内と外に立ちこめていました。まさに建学の精神がQ体には宿っていたのです。

Q体はろくに補修もされないまま、同時期に解体された新体育館以上に、学生に使われどおしでした。使い心地のよさは歴代の体育科教員の折り紙つきです。善福寺キャンパスの卒業生はほぼ全員そこで授業を受け、また各種クラブ活動の練習の場となってきました。創立期以来、折々のセレモニーやパーティーの会場とされ、人々はそこで出会い、そこから巣立って行きました。社交の館つまり、多くの人々がそこで心を通わせ合う公共の場として造られたことは、最後の最後までその面目を保ちました。解体間際まで、保存を願う者たちがそこに集い、老いも若きも志を共にし力を合わせて立ち上がったからです。古い校舎に、死すべき生まれ出ざる者たちがその共同性において姿を現わしたのです。

Q体には、天空と大地、神的な者たちと死すべき者たちが、紛れもなく宿っていました。Q体は、卓越した芸術家の建築作品でしたが、それだけではありませんでした。世界の全体がそこに凝縮して映し出され照り映える舞台、そういう勝義の「物」だったのです。

私は、Q体運動に携わるまで、ハイデガーの「物」論こそ知っていたものの、それどころか当のテキストを翻訳していながら、「物」の何たるかが、迂闊にも分かっていませんでした。しかし、Q体経験を通じて「建てることと住むこと」について考えさせられるようになった今、ほんの少しですが、「物」とは何であり、「建物」とは何であるか、が分かりかけてきたように思います。——物とは、世界を在るがままに現われさせる媒体であって、その物に囲まれつつ、この世界に私たちは住んでいるのだ、と。その住まいを樹ち立てることが、建築という営みであり、建てるとは、それゆえ、際立った意味で「住むこと」なのだ、と。建物を愛することは、世界を愛するレッスンの第一教程なのだ、と。